

Title	山形縣史蹟名勝天然紀念物調査報告, 第二輯
Sub Title	
Author	武田, 勝藏(Takeda, Katsuzo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1927
Jtitle	史学 Vol.6, No.4 (1927. 12) ,p.158(632)- 159(633)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19271200-0160">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19271200-0160</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 淡路と西宮に於ける人形操の調査

(吉井太郎編)

本書は兵庫縣史蹟調査報告第四輯の別刷である。記す迄も無いが、傳統的の郷土藝術が漸次衰滅を來たし、今日幸じて其の餘喘を保つものが甚だ多く、前記の淡路人形操も其の一である。

淡路の人形操は其の盛期なる享保元文の頃には其の座數四十餘株にも達したといふが、其後漸次衰微減少するに至り、現時にては辛じて殘蘖を保つ狀である。次にこの操の起源を尋ねるに、兩傳説あつて一は攝津西宮社家森兼太夫の工夫にかゝり兼太夫淡路に渡つてこれを傳へたと云ひ、他は同じく西宮の住人百太夫なるもの神慮を慰めんが爲めに人形を工夫し、諸國を巡歴の後淡路三條村に定住して其の妙技を弟子四人に傳へたといふ。この兩説は其の起原を西宮に發すといふは同一である。猶ほ天正十三年に蜂須賀家政は徳島に封ぜられ、其子至鎮の時元和三年淡路を併領し、其子の忠英に亘る三代の間、人形操師を保護したる事實を傳ふる處より、操の起原は大凡慶元の間に来て淵源し得られるかも知れぬ。

次に淡路人形操の名家と傳ふ攝津西宮の操及び傀儡師の起原は未詳であるも、其の由來は中古に溯原せられ、時慶卿記慶長十九年九月廿一日の祭に、新上東門院に操の妙技を台覽に入れた記事が見えるによつても、其れ以前に鄙藝の人形操・淨瑠璃が、遙々と花の都にまで盛に興行せられしを窺知し、且つ其の起源の相應に遡るべき察知すべきである。然し西宮のこの妙技も寛保頃より痛く衰微し始め、爾後盛時に復するとなく、故老の言には壽永頃に

は全く廢絶したといふ。猶現に西宮市の西宮神社の末社に百太夫社あつて祭神は道君(道熈又は百太夫とも稱す)と云ひ、これを傀儡師の祖と言ひ傳へて居る。

以上は吉井氏の調査の摘録で、猶ほ本書には史料寫眞十數種を挿入して、讀者の參考となるべきは云ふ迄もない。終に筆者はこの文獻史料の僅少なる兩地操の技藝について研究報告せられた吉井氏の勞に深甚の敬意を表するものである。(昭和二、九、廿、武田勝藏)

## 山形縣史蹟名勝天然紀念物調査報告

第二輯

本書に收録するものは史蹟三九、名勝五、天然紀念物六である。其の中史蹟に就いて簡単に紹介する。

(一)出羽國分寺址(山形市、本楯村より移遷後のもの) (二)最上滿直墳(山形市、山形城主) (三)最上義春、同義墳墓(山形市、城主並に一族) (四)長谷堂城址(本澤村、最上氏の屬城、慶長五年最上義光直江兼續の兩將離離を決した處) (五)春雨菴址(上山町、寛永六年僧宗彭(東海寺澤庵和尚)麗流の地) (六)荒谷古戰場(山寺村、正平六年北畠顯信が吉良貞家貞經父子を擊破した處) (七)天童古城址(天童町、應永年中斯波滿直の創築、天正五年頼久は最上義光に抗し、却つて敗れて落城す) (八)中野城址(大郷村、應永年中斯波滿基の築城) (九)畑谷城址(作谷澤村、脇築淡路守の築城、元龜天正の頃最上氏の江口光清更に城郭を擴張し、慶長五年上杉氏の臣直江兼續の爲に落

城し光清自盡す)——(一〇)最上直家墳墓(鈴川村、最上氏の祖)——  
 (一一)衛守塚(出羽村、明治十二年木棺並に副葬品を出す)——(一  
 二)祝部土器窯趾(柴橋村)——(一三)平鹽熊野神社並平鹽寺(柴橋  
 村、養老五年紀州より勸請すると傳へ武將の崇敬深し)——(一四)  
 溝延古城址(溝延村、大江茂信の築城、六代宗廣の時亡ぶ)——(一  
 五)天満の一里塚(西里村、周圍八尺餘の松)——(一六)中條備前守  
 墓(谷地町、應永年中谷地の領主)——(一七)野邊澤城址(常盤村、  
 天文十六年野邊澤滿重の築城)——(一八)清水城址(大藏村、山形  
 の支城、文明八年支別孫次郎滿久の築城、慶長十九年義親の時  
 父最上義光の爲に落城す)——(一九)小國城址(東小國村、細川直  
 元の居城、天正八年最上義光之を滅して藏増安房守に與ふ)——  
 (二〇)金山館址(金山村、最上義光の臣丹與惣左衛門の居城)——  
 (二一)高畠城址(高畠町、高倉天皇の時樋爪五郎高衡始めて築  
 城、後伊達上杉兩氏を経て明和以來織田の居城)——(二二)小松城  
 址(小松町、伊達氏の臣中野常陸介の居城、後に桑折氏を経て上  
 杉氏に及ぶ)——(二三)荒砥城址(荒砥町、最上氏の要城、伊達蒲  
 生兩氏を経て上杉氏に及ぶ)——(二四)鮎貝城址(鮎貝村、鮎貝藤  
 太郎成宗居城、伊達蒲生上杉三氏を経て寛文四年以來本庄氏の  
 居城)——(二五)實谷の横穴(黒川村)——(二六)妹澤尼公屋敷の銀  
 杏樹及經塚(立谷澤村)——(二七)東禪寺右馬頭墓大山町、東禪寺  
 城主弟曉勇の名あり)——(二八)加藤肥後守忠廣母子墓(鶴岡市)  
 (二九)本橋村新田目城址(本橋村、國府の地といふ)——(三〇)出  
 羽國分寺址(本橋村、最近發見の古瓦によつて其の位置が決定さ  
 れたといふ)——(三一)龜ヶ崎城址(鶴渡川原村、初め東禪寺氏の居

城、後、上杉最上兩氏を経て酒井氏の有となる)——(三二)砂越城  
 址(中平田村、砂越氏の居城、天正年中最上氏の爲に滅さる)——  
 (三三)飛鳥村の一里塚(南平田村、盛土を殘す)——(三四)經ヶ藏  
 山の經筒(田澤村、陶質のもの)——(三五)生石村南北朝時代の諸  
 碑(東平田村)——(三六)北澤村正和三年の碑(東平田村)——(三七)  
 横代村正平十年の碑(東平田村)——(三八)山谷村の古碑(南平田  
 村、元弘二年應永八年、後者は八幡森と稱する丘山にあつて、  
 同所には八個許の古墳がある。猶編者は『天保十二年其一個を  
 發掘して、二個の甕の口を合せて埋められあるを發見す、其中  
 に刀劍其他腐朽せる金屬を入れる、甕の外部よりは薙刀其他の金  
 屬を出せり。(中略)依つて案ずるに武人の墳墓なること明かな  
 り、且應永八年の碑は此墳墓の傍の籤の中に倒れり。(中略)應  
 永八年の墳墓其他は興國五年に山谷の河内城に據りて北朝と戦  
 ひ戦死を遂げたる南朝の中院具信以下の墳墓と認むるを得べ  
 し』と附記して居る。——(三九)熊野田村正平七年の碑(中平田  
 村)以上。

最後に筆者はこの詳細なる調査に努力せられたる各員に深甚の感  
 謝の敬意を表するものである。(武田勝藏)

### 石川縣天然紀念物調査報告

第三輯  
 (石川縣編)

本書は本邦三名山の一たる白山の調査報告で、其の火山帶、地  
 形、同地方の水系、地質(噴火、礦泉)登山の経路及び日程、氣  
 象より其の動植物等に至る迄を詳述せられてある。白山は加賀の